

柳里恭の誠の説

中村, 幸彦

<https://doi.org/10.15017/2332810>

出版情報 : 文學研究. 63, pp.27-40, 1966-03-10. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :



柳里恭の誠の説

中 村 幸 彦

一

柳里恭は云ふまでもなく、柳沢淇園、近世崎人伝中の大立物であり、近世の文人の極初期の一人であり、且つ文人画の開拓者でもあった人物である。ここにかかげた「誠の説」に、もし副題を附するとすれば、「柳里恭における文人意識」とでもなるであらうか。私のひそかな研究の今の段階で、彼の文人としての意識を是非うかがひたいのであるが、由来文人は、その心境を語らない。学芸の別の面では、その意見を發表する人も、その生活態度については、かたくなに口をつぐむ人が多い。現に里恭同時の服部南郭も、「凡ソ百行ノ事、未ダ嘗テ一言モ妻子家人ニ対シテ之ヲ語ラズ、少キヨリシテ然リ」（源頼順の南郭服夫子墓誌銘）であった。しかし南郭は儒者、様々なことに様々の意見を發してゐるの間、自然その心境の外に流れ出ることなしとしないが、里恭は武士、書き残したものが既に乏しい。

その中から文人意識を探し求めることは困難でもあり、肯へて試みるは誤るの危険をとまなふものである。里恭が文人生活に入つたについては、その境遇からして、主家柳沢家の衰運、家庭における兄との不和などが、その理由として上げられてゐる（植谷元氏「文人の成立―柳沢淇園における」―大和文化研究第四卷第五・六合併号）。それはそれとして十分の理由として肯定されるが、それらの云はば外面的理由と共に、内面的とも云ふべき里恭の生活意識に、そ

の如き生活を希求するものがあつたのではない。衰運といへども主家は没落したのではない。彼と不和の兄も早く歿して彼自ら家長となり、数千石の藩の重役となつたのである。それでも、或はその故に、かへつて彼の文人生活が続いたとすれば、彼の心境にその意識を正さないわけにはゆかない。揣摩臆測を肯へて試みる所以である。

二

今日に残る里恭の唯一のまとまつた著述は、年少二十才代の初めに書いたと推量するひとりねである。青年時のよい意味、悪い意味における放蕩の記録であつて、諸芸諸字の経験感想、事物についての知識批判、彼の嗜好の奈辺に存したかを告げる記事で充満してゐる。が人生論的な言質はやはり少い。ただこの書の過半をついやした遊女遊びについては、一箇の見識を示してゐる。かつて阿部次郎氏が「遊客の立場から見た遊びの哲学」（徳川時代の芸術と社会）と称した部分である。

彼は早くから花柳の巷に出入沈湎した。吉原では、その粹人達に伍したことを自ら伝へるし、柳沢家が天和郡山に転封になつてからも、奈良の木辻に足しげく通つた。ひとりね著述より数年後であるが、彼が一時謹慎を命ぜられた時の理由が、不行跡であつた程である。遊里が、それ程に彼をとらへたのは、第一に遊女の容貌举止進退心情の美しさである。彼は万事について、ちまちまと整つた可憐で洗練されたもの、彼の美しく彩色した花鳥画に共通した感じのものを好んだ。彼のその審美眼・嗜好にかなふものが、その種の遊女であつた。ひとりねによれば、素人女子の嫌悪が、遊女讚美を倍加してゐる風がある。彼の諸芸諸字それは、後世「文学武術を始めて人の師たるに足れる芸十六に及ぶ」（畸人伝巻之四）と云はれる多方面のものであるが、そのいづれにも興味を抱けば、沈溺せねばやまぬのが、彼の性癖であつた。遊女の美しさに打込んで、遊女との遊びに沈溺した。

余十三の時に唐学をまなび、今二十一の暮まで覚へし学問、ほれし太夫の帯とつかへに仕たし

至極思ひ入し女郎の尿をのみて、其女郎、病本復するならば、吞てやらんといふも、にくからぬ心ざしにやこの種の語句は比々として、その書中に見える。そして、遊女遊びは性欲を第一にすべきでない、愛情を先にすべきことをくりかへしてゐる。その愛情については次の如き考を持った。自分は遊里でとかく迷惑がられる屋形者であること、自分が女に好かれるやうな容貌の持主でないことを反省して、客は遊女に惚れて可愛いと思つて通ふのであるが、その代償として、愛するとの返事がかへつてくるを希望するけれども、遊女に自分を愛することを要求すべきではない、とも云ふ。

余が曰、「都て女郎にかわゆひといふ事、其女郎が人に行とて、にくひものにあらず。人にほれた故に其女郎がゆき、こつちが其女郎に思はれぬによりてすてらるゝなれば、こちの女郎のかわゆひごとく、其女郎が向ふの男にほれたときへ合点すればよし」といふも一説なれども、口惜は尤成人情なり。

とある。元来遊女は「うそ」を云はねば成立ち難い境遇である。その実状に思ひをめぐらせば、「惚れた」「いとしい」と口に出して、それが「うそ」と判明しても、怒るべきではない。怒るのは遊女遊びを知らぬ者のことである。自分がその遊女が可愛いと思ふ心情に徹して、行動することが遊客のあるべき姿だと述べる。

かよふに心をくるしめ、人にもいはれぬ下もへにもへて心をなやまし、心中立て、外の女の手にもぎらぬ様にするを見て、「ぐち也ぐち也」といふは恋路をしらぬ人、

である。遊女が「うそ」を云つたとて、遊客が「うそ」をもつてむくふべきではない。「女郎の見ぬ所に、心底をかはらず、いくとせへとも思は石になして大事がつてやるが恋路なりとかや」である。かくの如き主張をし、かくの如く振舞へば、「いかひたわけの様に思ふなれど、人は左様に心中がなければ、やくにたゝぬもの也」でもある。しか

し遊女と遊客の間も、人と人との交渉であつて、馴染むに従つて情の出てくるものである。客の眞実がわかれれば、たとへその客憎しと思ふ遊女でも、その憎さは自ら稀薄になるであらう。色恋を別にしても、人間としての人情の交が成立するはずである。馴染んだ末で遊女を女房にむかへた夫婦、これ程仲のよい夫婦がないと云ふのも、色恋の上に更に人間としての情の交がある故である、などと論じた末に、

うはきといふうち、男はどうはき成ものなし。もと男女のかたらひの、しごくおもしろいふ色欲の骨髓をしらぬ故也。色欲のふかいといふ、其ふかい骨髓をしりぬいてからは、不心中にて一たんかはせし事などを引くり返すといふ事はない事也。信の一字を守る故ぞかし。信は五常の枢籥の如し。色にても欲にても、万物千事はなるゝといふ事なきもの也。いたりいたりては平生になる。我儒の工夫、学問功をつみ、書にひろからずんば色欲の大極意は知るゝ事にあらず

と大氣焰を上げてゐる。後にも引用する如く、里恭は度々「信」の字を用ゐて、彼の「遊びの哲学」はこの一字に落つくやうである。

「信」の語の概念は彼自ら云ふ如く、儒学の用語から出てゐる。それでは当時日本に行なはれ、里恭がその説に接し得る可能性のある儒学説、朱子学・仁斎学・徂徠学の各学派の各々相違した見解の、いづれに彼は基いてゐるか。朱子学の性理字義・仁斎学の語孟字義・徂徠学の弁名について検討した結果は一々報告しないが、やはり朱子学によつたかとの結論が出た。里恭の儒学の師は谷口元淡であつて、初学からこの人に附いたと想像できる。元淡は、荻生徂徠の門であつたが、彼が師事した頃の徂徠は、まだ朱子学を守つてゐた。元淡は、その後、師が古文辞学の新風を樹立した時にも、初めに修めた朱子学から新しく転じようとはしなかった。かへつて、徂徠の新説をかかげた学則の附録について、疑問を提出し、徂徠のそれに対する返事に更に疑問を重ねたが、その返事なくして徂徠が物故した。

享保十三年その問答を刊行してもある如く、朱子学を通した人である。この書に序したのが外ならぬ里恭であり、彼の遺文の所々にも、「^下暨長從谷口老先生聞性理之学^上」（「復益一幹書」）の如き文章が見出されて、里恭も生涯性理之学を守り通したのであった。そこから見て、この「信」の文字は朱子学的概念に従って解すべきである。遊女遊びを、朱子学で説くとは、これは変なことになって来たものである。

信の語は、論語の学而篇に屢々見える語であるが、儒学では易経などにもあって忠信と熟して用ゐられる。学而篇の集注に「^己己之謂忠。以実之謂信」とある。性理字義によればこれは程子の語で、朱子は採ってこれを確定の論とした。以下字義にこの語句を敷衍した説明がある。その説明を引用して私の解釈を加へるより、近世中葉までの性理字義の理解を助けた性理字義諺解のその条をもつて、これにかへよう。

尽己トハ自家心裏面ヲ尽シテ存主スル処ノモノヲ以テ云フ、自家心裏面ハ我心底ヲ云フナリ、存主トハ心ニ主トスルモノヲ云ナリ、心底一毫モ尽シ残スコトナクシテ、是忠ナリ、若十分ノ説話七八分ヲ説テ二三分ヲ残シ留メハ、即是不尽ナリ、忠ト云フヘカラス、以実トハ言語ノ上ニ付テ説コトアリ、此実物ニ因テ云フトキニ無ヲハ無キト云ヒ、有ヲハ有ト云フ、モシ無ヲ以テ有トシ、有ヲ以テ無トセハ、即是以実ニアラス、信ト云フヘカラス、忠信ハ判然二物ニアラス、判然ハワカル、ヲ云フナリ、心中ヨリ發出シテ一トシテ尽ササルコトナキハ忠ナリ、外ニ発シ来テ皆以実ハ信ナリ

これに、も一条「論忠信各有所主」の、

信ハ言語ノ上ニツイテ云フハ、言語ヲ発スルノ実ナリ、事業ノ上ニツイテ云フハ事ヲ行フノ実ナリ、実理ヲ以テ云フアリ、実心ヲ以テ云フアリ

の説を加へて、里恭の遊客論に移項すれば、自らその説が理解出来る如くである。遊女がいとし可愛いと云ふ自己心

裏を、一毫を残す所なく示すべきであつて、その実行にあたつては、それも言語行動に至るまで、実を以てつらぬくと云ふことになる。

しかし「信」一字はそれで一応解せるとしても、色欲の骨髓を肯定する、この論の基礎が、これのみでは解されない。私がここで提起した遊女遊びの理論を朱子学で述べると云ふ方法の、甚だ逆説めいた奇妙さは、なほそのままに残る。よつて翻つて、ひとりねの信についての使用さまを、今一度うかがつて見る。ひとりねに数回にわたつて出る話題に、奈良の木辻の遊女源氏と、敦賀屋と称する町人との大鳥居の前での心中一件がある。敦賀屋は女房をもらふ以前から源氏と馴染んだが、浮世のさがで女房を持たねばならぬことになり、子まで出来た。それでも二人の愛情を通さうと、女房を離縁せんと心がけた所に、他の客との買論のはてに、心中したのが事情である。その敦賀屋を里恭が評する前提に、

あの女ならば此世におもひであらじと、一筋におもひ入る所が信の一字にして、うまれ得たる所の人の人なり。

有難き所なり。此信といふものは、親に仕へ主に忠をあらはし、友だちの交り、兄弟の道、シムライ 属家のよしみまでも、此一字がはづれては、なんの役にたゝぬくさびのはづれたる車のごとし。是此信といふ一字さへうしなはずば、いかやうにも平生は樂むがよき也

と云ふ。敦賀屋は信という字を持つて生れたけれど、源氏一人を守らず、親のすすめで女房を別にもつた。それはまだ許すとしても、「さはるに煩惱」で未練にも女房に子まで作つた為に、信の道を失つて、心中に至つたのであると結論する。里恭のこの論によれば「信」は、もつて生れるものとなる。そして、そのことは性理字義の信の説に抵触する。字義に云ふ。

忠信二 同字近誠字。忠信。是実誠也。只是実。但。誠是自然実底。忠信是做工夫実底。誠是就本然天賦真実道理上

立字。忠信是就人做工夫上立字。

又云ふ。

誠与信相對論。則誠是自然。信是用力。誠是理。信是心。誠是天道。信是人道。誠是以命言。信是以性言。誠是以道言。信是以德言。

と。簡単にこれを解すれば、持って生れた「信」は「誠」と云ふべきで、言語行動において誠実ならんと努力工夫するのが信だと云ふことになる。里恭は信を五常の枢籥と云ふが、字義には、忠信は「五常実理之発」であるとする。忠信は五常に不可欠のものであることは同じだが、「発」（諺解には「忠信ハ即是五常実理ノ発出セルナリ、其物ニ接シ言語ヲ発スル処ニ至テ始メテ名ケテ忠信ト云フ」と解する）と、枢籥とは、甚だ相違がある如くである。もし、朱子もその注解を作った周敦頤の通書に「誠五常之本、百行之源也」の語を持ち来って、「五常実理之発」にかへることが出来れば、甚だ自然に里恭の前掲の文が解釈出来さうでもあり、且つ「枢籥」の語に置換へることも自然となる。

儒学における誠は中庸に見える所、後儒では周敦頤の重視した所である。よって朱子の説は、中庸或問・通書解、その他語類、文集にもまゝ見える。中庸或問に、

曰。誠之為義其詳可得而聞乎。曰。難言也。姑以其名義言之。則真實無妄之云也。若事理之得此名。則亦隨其所指之大小而皆有取乎真實無妄之意耳。蓋以自然之理言之。則天地之間惟天理為至實而無妄。故天理得誠之名。若所謂天之道鬼神之德是也。以德言之。則有生之類。惟聖人之心為至實而無妄。故聖人得誠之名。若所謂不勉而中。不思而得者是也。至於隨事而言。則一念之實亦誠也。一言之實亦誠也。一行之實亦誠也。是其大小雖有不同。然其義之所歸。則未始不在於實也。

曰。然則天理聖人之所以若是其実者何也。曰。一則純。二則雜。純則誠。雜則妄。此常物之大情也。夫天之所以為天也。沖漠無朕。而万理兼該無所不具。然其為体則一而已矣。未始有物以雜之也。是以無声無臭。無思無為。而一元之氣。春秋冬夏昼夜昏明。百千万年。未嘗有一息之繆。天下之物。洪纖巨細。飛潛動植。亦莫不各得其性命之正以生。而未嘗有一毫之差。此天理之所以為実而不妄者也。若夫人物之生。性命之正。固立莫非天理之実。但以氣質之偏。口鼻耳目四支之好。得以蔽之。而私欲生焉。是以当其惻隱之發而忤害雜之。則所以為仁者有不実矣。当其羞惡之發而貪昧雜之。則所以為義者有不実矣。此常人之心所以雖欲勉於為善。而内外隱顯常不免於二致。其甚至於詐偽欺罔而卒墮於小人之帰。則以其二者雜之故也。

長々と引いたが、以上は周子の説などを加へつつ朱子の誠の説をよく明瞭に示すものである。性理字義も殆どここに採つて、その解説としてゐる。字義を利用して簡単に説明する。朱子学においては宇宙に充滿しあらゆる事象心象を支配する理又は性なる真理がある。これを又道としてもよいのは勿論のことである。この理が自然界にやどつて、真実の姿を示す。古より今まで一寸の無妄なくして、四季昼夜が變転してゐる。又果物も甘いものは常に甘く、苦いものは苦い現象を見るが、これが天地の実理であつて、誠と称すべきである。その如く人の心に於いても、理が流行發現して、何の工夫努力をもつてせずして、生を受けるのははじめから、道にかなふ実然の心なるものがある。井の中に落ちた子供に対する惻隱の心、餓えた乞食に対する慈善の心がこれである。生れながら親を愛し兄を敬するものも、等しくこれ誠である。ただし全心が生れながらにして誠であるのは聖人のみである。賢人は努めてこの域に達せんとする。朱子学の理氣二元論によれば、性が流行發現する場合、氣が動いて、誠となつて現はれず、私欲物欲の人も生れ出る。その人といへども、その惡がやや息むに及んでは、誠が自然に發見出来るものであると云ふことにならうか。

性理字義の引例は、誠の倫理的な要素を強調してゐるが、自然界の四季循環論から、人間の心性に論を及ぼす所

は、一種の自然主義とも認められる誠の説である。ここに里恭のいはゆる色欲の骨髓なるものを持来たれば、今日の語で云ふ恋愛本能であつて、これは万人の生れもつたものであり、人倫の上からも惡とは称せない。解し方はさまざまであらうが、礼記や史記にも夫婦は人倫のもとであるとの意味の言葉があると、里恭は解したのではないか。とすれば女が可愛いと思ふの情は誠である。その誠を信として実行に示すことが、色欲の骨髓たる誠に即した、遊びの道の一大事となるのである。信と誠を一貫して、一つにしてこの頃の里恭は理解してゐたのではないか。

「又いつものうそようそよ」といふて、誠の事もうそに成事なれば、大事といふはいか成どうらく成中にても、信の一字を忘るべからず

と、誠と信を一つにした用ゐ方もある。甚だ故事附の如くであるが、かく解して、初めて里恭の説の筋が通る如くである。色欲などの本能を認めることは、元淡の論の中にもある。

謂人欲淨尽者。欲与人欲不同。寒而欲衣。饑而欲食。此謂欲也。雖聖人有之。不可欲欲之。此謂人欲。聖人無之と、徂徠の文を評して、徂徠から、「是亦宋儒之解」と逆に評されてゐる。その上、日本の儒学界の動きは、朱子学の持つ、そして後世から様々の論議のある理氣二元論を、一元論的にして、氣即ち情を重んずる傾向にあった。早く朱子学者である林羅山から見え、仁齋の学説が社会に迎へられたのもその故である。その流れの中に、里恭がかかる理解を持ったことも、多少の所以なしとしないのである。

三

里恭が青年時の遊びの論における「信」の説を、それは、そのまま「誠」の説に通ずるものと見て、後年に僅に残る遺文に接するに、再び「誠」の語に遭遇する。自筆遺稿に収まる「文説」の中に次の一文がある。

文以誠為主。誠一而言一矣。其言一矣。則文其何之。故欲學文者。先究其理。能究其理者。一言成章。彬彬其美。不務而中（欠）無學以究理。闡理以能文者鮮矣

「文説」なる一文は、當時流行した古文辭風の無用の美文を批判して、文章如何にあるべきやを説いたものである。彼がその文中、何をすぐれた詩文としたか、その例に照らせば、前掲の文意の、誠の義が明らかとなる。諸葛孔明は能文の聞えがないが、出師表あり、項羽や荊軻は詩人でないが、垓下や易水の詠があつて、その詩は千歳の後までも、人の心を打つものを持つてゐる。その所以は表現になくして、その忠臣節義の心、悲愴慷慨の志が、渾然として骨髓の中から流出しているにあると例示した。この文章にも、骨髓・理・誠の三語が一貫した關係をもつて、揃つてゐる。ひとりね中の信を、肯へて誠に通ふものとしたことも、遊びについての人生論が、文章についての人生論へ発展したと考へるならば、無理でなかつたやうにも思はれて来るのである。

そして、孔明が君に忠なのは、「誠忠」の語が既に存する如く、「誠」のあらはれである。孔明の忠の場合は、その倫理の面に属するが、項羽の垓下の歌は、「力拔山兮氣蓋世、時不利兮雖不逝、雖不逝兮可奈何、虞兮虞兮奈若何」と、愛馬や寵姫によせる愛情をも、ともなつてゐる誠情のあらはれであつて、これも亦自らなる人間の実の顯現であり、誠である。里恭に云はすれば、遊女をいとしみ愛する信又は誠と同質であるであらう。かくの如くすぐれた文章とは、誠の顯現にあるとするならば、文章を作らんとする者は、表現修辭の言葉を求めるよりも、表現せんとする精神の内面をつききわめるべきである。はたして誠なりや否やと。誠は理の自然と心にやどつたものであつて、誠の究明は即ち理の究明である。換言すれば、真実無妄の本当の自己を確に表現しようとするやを反省することである。それが本当の自己ならば、表現方法は、第二の問題として、すぐれた文章となる。

文章既にしかりとすれば、信の一字が「色にても欲にても、万物千事はなる」といふ事なきもの」であつた如く、

誠の一字は、書にも画にも、その他あらゆる学芸の場合に、里恭の理論の根拠となると考へてよいであらう。彼の書画は、無妄真実の自己の表現であらねばならぬことになる。私はこの自己を性急に、文人の作品に示された個性と結びつけないでおくけれども、相似た方向を志してゐることだけは見ておかねばならない。

四

述べ來つた所は、文及び諸芸の創作と作品についての誠であるが、ここで一段飛躍させて、それらの創作意欲に關しては如何であらうか。類推して、それは性欲の骨髓に相当する。性欲の場合、性欲ではなく、純粹に美を讚美し、いとし可愛いの情であることが、信又は誠において不可欠であつた。諸芸においても、ひたすらに遊びたい欲望、純粹な創作衝動でなければならぬことに、里恭の理論からはなるはずである。名声を得たい、金錢を得たいなどの欲望が、創作心に附随することも世には多いが、里恭の書画諸芸にあつては、さうあつてはならない。

嗚呼。書画之於技。可以自樂。不可以与人一与人。則非不益于德已。或一時毀譽釀成之疵瑕。失志者成住住是矣

(復益一幹書)

と反省してゐるし、時に画を人に与へたことを後悔した日記の一章もある。

一今日絵之儀にて殊之外立腹仕候儀御坐候、元來たのしみ書申候を、右之儀ハうちたや次郎兵衛かたよりも絵きぬたのみ参候付て、(中略)然所ニかやうなるさいそくなる事、日連絵をかき申候ハゝわれら所望筆とりよせ申候て遣しけれ可申候よし被申候、右之筆も参不申候、依之手前にても随分心つくし申候へ共長崎よりもとりよせ被申候へ共手前へハ遣し不被申候、手前よりもたゝもらひ申候心底にてハかつてもつて無之候、(中略)慰之事にて腹をたて候儀かつてもつて可在候儀とも存不申候付て、今日と申今日一生の絵をさため申候、此絵之外ハ日

本の神冥理をかけ申候て書き申間敷と存候付、此儀をしたゝめ申候てさし置申候

これで里恭は絵を画なかつたことは恐らくないであらうが、一途で真摯な彼の性格と、彼の画に対する心持を示してゐるのではないか。「誠」であり「骨髓」を守る事を、人からおかされることも、又自分の心に邪念の入ることをも嫌つてゐる。誠一筋を、その信条としたのである。あたかも愛する遊女に代償を求めずして、可愛い為に通ふことに共通した態度である。

里恭は、彼が真面目に勤めた武士の生活の外に、風流文事に遊ぶ自己を、それが上に見て来た如き誠のものであることによつて肯定したと見てよからう。誠の説をもつて、彼の文人意識の基盤と見なすものである。朱子学の誠の解を自然主義的なものと述べたが、述べてここに来て、里恭においては、一種の本能肯定の精神が、その誠の説に含まれてゐたと見るべきかも知れない。服部南郭の文人意識の中には、師の荻生徂徠の説へた本性不変化論があつたやうである（拙稿「文人服部南郭論」——九州大学文学部四十年記念論文集）。近世の文人趣味が近頃注目されるについては、その個性尊重、自由主義などが一括して問題になるやうであるが、その意識の根底には、それぞれの環境教育において、色々のものがあつたとすべきであらう。

五

里恭の誠の説を一種の自然主義、本能肯定の精神などとして見て来て、なほ参考とすべき一事がある。里恭は晩年、慈雲飲光に参じてかなり親炙したのであるが、その慈雲が晩年筆写した麤細問答なる一書が、その全集の補遺に編入されてゐる。その中に、「柳里恭問ひて曰く」「居士答へて曰く」となつた問答と、「多田内記問ひて云く」「柳里恭居士答へて云く」の問答と、龍華山の楚石和尚が柳里恭に書を述べ、書学の趣をたづねた一条、計三つの里恭に關したものの

が入つてゐる。ここで問題にすべき内容のものは最初の間答である。それにしても里恭が五十五才で歿した宝暦八年は、慈雲四十一才であり、この問答の自筆本は筆蹟からして、文化元年八十七才で歿した慈雲の晩年のもの、その間約五十年、自筆本にも色々書き改めがあると聞いてゐたので、全集補遺の編纂に関係せられた木南卓一氏にその点の教示を得た。問題の問答の初めは「有人問云」とある「有人」の「人」を時に改め、「更に柳里恭問云」と改めてあるとのことである。これならば、近世の歌学書にも応々例があつて、發表を思い立つ時には個有名詞はなるべく少くして、「某」とか「人」とかとする。慈雲もこの問答を一度はさうした方針で、「有人」としたのであらう。が書き進めて、楚石が書学を聞くの一段を思ひついた時、これは柳里恭と明記しなければ、文が通じがたい。ここで明記するならば、前出で「有人」としたのも、明記した方がよいと改めたかと考へられて、初めの問者も慈雲の記憶に明らか
に里恭であつたことになる。答へた方の「居士」であるが、その内容は、慈雲の他の本と見合せて、彼の口吻そのままである。木南氏の教示には、同氏が長谷宝秀先生の筆写本から転写されたものには、「答へて曰く」のみで、「居士」の文字がなかったし、内容は慈雲に相違なからうと云はれる。里恭の生前、二人の間にこの問答があつたと見て大体よささうである。問答の内容は、神儒仏三教をめぐつて、如何なるが正知見かの間答である。その答の中に次の如く、自然の考へがしばしばに見えるのである。

道自然法爾に備はりて闕減なき、これを正法と言ふ。構造布置して成立せるは皆僻解なり。

儒門に聖人と名づくるは必ず聰明叡智の人なり。仏門に聖者と言ふには啞法者もあり。

我が国の神道は天地とともに成立せる道にして全くこれ正法なり。支那儒道の衆聖人の手を経て、孔子に至つて集めて大成すと云ふに同じからず

以上の引用の詳な解説に相当するものが、慈雲の十善法語の不正見戒の条にあるけれども、里恭の説をうかがふ今

は、一々は不要であらう。ここの道自然法爾にそなはるとの論が十善法語や人になる道でも、慈雲の考の基本となつてゐる一事のみでよい。人になる道では「山是山水是水」の語を引いて、自然の自ら道にかなひ理にかなふ事から、人間の上に説き及んでゐる。もつとも自然法爾は慈雲独自のものではなく、仏教の元来もつ所のものである。そして、それが儒学の誠に相似たものであることは、性理字義諺解が、その「誠」に関する条下で、わざわざ原文を離れて附記し、二者の差を弁別してゐる。「仏書ニハ法爾ト云ヒ法然ト云フ、皆自然ノ義ナリ、一切万法其マ、ナル処ヲ法爾ト云フ」として、大日経疏や楞嚴経釋要を引用する。ただし諺解は、自然をもとにして、その下に因縁を説く所、儒と相違するとの結論になつてゐる。今私は、里恭が誠に似た法自然の論を慈雲から聞いただらう資料の外は、彼自らのそれに示した反応の具体的なものを持たないので、これ以上は何とも進め得ないのであるけれども、かかる説を聞くことによって里恭が共鳴し、感銘して、慈雲に親しんで行つた心境には、前述した誠の説を既に彼が抱懷してゐたことが、原因ではなかったかと考へるのである。